

仏教と児童福祉

—— 児童福祉施設における小児の栄養 ——

中 野 迢

(武庫川女子大学助教授)

児童福祉施設に対する社会的関心は、年毎に大きくなってきている。しかし、関連する小児栄養の問題に対する関心が未だに薄く、成人はともすればその事項の概念を忘れがちか若しくは馴染みがなくなっている。

児童福祉施設職員（幹部職員、保母）、児童福祉の学徒、小児科医、栄養士、保健婦、看護婦などのうち、小児に接する機会の多い人達は、小児栄養に関する認識が高まるにつれ、小児栄養の重要性を常に感受し、小児が満足、楽しみなどを得られるように意をつくしている。昭和二十二年に児童福祉法の制定、二十三年の児童福祉施設最低基準の制定から今日に至る三十余年の経過の間に、関係者の努力がそれを示

す小児体位の向上となっている。

以前に遡ると、我国では聖徳太子の建立による慈善救済施設の四箇院（主に悲田院）にみられた仏教思想における貧窮者や孤児の収容から、武家政治の封建社会にみられた実力主義の社会思想（権力者の政策的事業）への変遷、明治維新以後の西欧文明による産業発達途上の副産物としての社会的貧困者救済が組織的に行われるようになった。さらに関東大震災を期に国や民間によって、福祉的事業の施設が増設され、生活保護、母子保護、保健所法などの前身的なものが制定されるようになった。昭和十三年、厚生省の設置と同時に、社会事業法が制定され、事業の推進、第二次世界大戦突入、人的資源確保のための政策が行われた。

敗戦後は、その混乱と緊急的児童問題への変遷による児童福祉法の制定、児童保護事業の展開への推進に向った。

小児栄養の領域で、保母に対しては、①小児の心身の健やかな成長に必要な小児栄養の重要性を理解し、栄養、食物、献立、調理に関する基本的知識の修得、②小児の発達段階に応じた栄養法の原理を日常生活に生かす応用力の養成、③保母として必要な集団給食管理の方法の修得、④世界の子供の栄養・食生活改善を目指す国際的な活動に関する理解。などが必要であるとされている。

国際児童年の意義深い年であるから、世界の子供に保母が接して子供に対する理解を、十分に深めるようにする考えが生かされなければならない。しかし、このようなことは、現実の児童福祉施設では困難を伴っている。

これら、次の世代を担う世界の子供達の小児栄養を科学性のあるものにしていく必要性があり、仏心を深めることによって、一段と、世界に通じる小児栄養管理の視界は発展するだろう。筆者の考えているこれ

らのことなどについて述べてみたい。

(一) 「栄養の文字」と栄養改善

仏教思想における栄養に関する用語がとりあげられている文献によると、今日の栄養学の基礎ともいえる深い関連事項が窺える。

我国で栄養の文字を明確に示している寺として、栄養寺がある。「この寺は元和元年（一六一五年）大阪夏の陣に、豊臣秀頼の子、国松丸こと苦厭上人が開山して、阿弥陀如来を本尊とし、当初妙音寺として山崎村中村に建立されたが、二十二年後の寛永十四年（一六三七年）の江戸初期に灘町の現在地に移転し、豊臣家と衆生済度のため、寺号を泰昌山安楽院「栄養寺」と改め、……無限の愛を表徴する阿弥陀如来を本尊としたもののようにもみられる。……苦厭上人の苦は陰陽五行説の火行に属し、苦味の羊であって、天下治まり、夏期で長養（育つ）を司るという現象である。苦味物質は循環器系の心臓・血管と小腸に参与する。火行の苦味系列は羊・にんにく・らっきょう・あんず・きび・豆などである。これら

を食べると補養し、体表に衛気となつて元氣を与える。厭。という字は、飽き足りるということ、旨い肉を飽きるほど食べるとの意味で、羊の旨い肉を腹一杯食べる上人だとの意味から苦厭を栄養としたものと推考する。またこの寛文年間頃には「食医要編」などが寺院（京都村上平楽寺・草山瑞光寺など）で発刊されるなど、寺を中心とする栄養問題が盛んであったこともあげられる（寺とは官廷、院とは官廷の部屋のこと。）と記されている。そのほか安養寺、養心寺、養賢寺（堂）、養生院（寺）、養徳寺、養安院などは栄養寺の同族であり、供養の用語は栄養と同意語で、宗教に発した語である。栄養は気、血、衛の組み合わせとされ、養は羊と食の字からなる」とされている。

表1 ‘栄養’字出現表

栄養用語歴	年代	原著・者名
「宏辞八人皆奉栄養」 (徐黄贈楊著詩)	265~419	晋書, 趙至伝, 太宗130卷の一書
「白萃栄養有曾参」	同	晋書, 趙至伝, 太宗
「吾小未能栄養 使老父不免勤苦」	同	同
「夫血気者所以栄養其身也」	同	同
「肝臓血而候筋虚勞損血不能栄養於筋」	605~616	諸病源候論(?) 巢元方
「栄養寺」伊予市灘町52所在	1637, 建立 (寛永14)	苦厭上人(豊臣秀頼の子, 国松丸のこと)
「血栄養~身候」蘭学事始(1815)	1733~1817 (天文3~文化14)	杉田玄白・蘭医
「栄養」医原枢要書(翻訳書)	1832(天保3)	高野長英・蘭医
「栄養」森鷗外・小池正真共著 「衛生新書」	1862~1922 (明治17)	森鷗外
私立栄養研究所(芝三光町)	1914(大正3)	佐伯矩
栄養研究所(現国立栄養研究所)官制勅令第407号	1920(大正9)	初代栄養研所長 佐伯矩

今日、西洋医学から中国医学の見直しを
いわれているが、表1に示す栄養字出現表^①
のとおり栄養の用語は中国から伝来してい
ることが実証されるので、栄養問題の見直
しも、このへんに科学的考察を加える余地
がある。

栄養学・食医学・本草学はBC五〇〇〇
〜四〇〇〇年にはバビロニア占星術、神農
食神発祥、黄帝医神発祥にはじまり今日に
至っているが、その間、日本栄養渡来説は
中国から漢学が伝わった二八五年若しくは
仏教が百済・聖王から伝えられた五〇〇年
代か明らかでないが、中国医僧、鑑真（六
八八―七六三年）が日本に医書数冊を持参
来航、栄養行事の正月のとそ酒、甘茶、端
午・七夕・うら盆・中秋名月などの料理、
そのほか、胡桃・胡麻、胡椒などの栄養食
品、その他を移入、家畜の去勢肥育など多
くの日本の栄養改善に尽力している。古く
から栄養改善は実施されてはいたが、一般
庶民に満足に定着し得なかったことで、今
日の栄養問題は歴史の浅い領域といわれ
ている。

筆者は、国際児童年に当たって、大いに

栄養改善は仏教による説得力を仰ぐことに
よってさらに意義あるものへと発展するも
のと考ええる。

前述の火行の苦味系列の食品、たとえば
にんにくは食卓の仏教医学^②にもとりあげら
れ、興味が持たれるものと思う。『ある蒜
園（ニンニクの栽培園）の主人が、ニンニ
クを求めて訪れた尼さんに、心よくニンニ
クをさしだし、園の番人に、「今日からの
ち、尼さんたちに各五つずつニンニクをさ
しあげなさい」と命じました。ところがあ
る日、主人の留守中に蒜園にやってきたチ
ウナンダという尼さんは、番人が主人の帰
るまで待つように制止したのもきかず、欲
ばって、「これは先輩の坊さん、尼さんの
分、これは今日の分、これは明日の分、こ
れは明後日の分ですよ」と、勝手なことを
いいながら、連れてきた後輩の尼さんたち
に命じて、園のニンニクを全部採ってしま
ったといいます。この話を聞かれたお釈迦
さまは、チウナンダ尼をお叱りになり、す
べての坊さん、尼さんを集めて、「今日よ
りニンニクを食べてはいけません」と、戒
められました。（一切経律部二、四分律卷

二十五）とあるように食蒜戒といわれる
だけあって理解できる。僧侶の健康や長寿
は、寺院の繁栄や寺院に対する仏教徒の一
致協力面で価値があり、将来への進歩を如
実に語ることを明白に示している。

児童福祉の花形として誕生した保母、指
導員らは、児童の社会適応、社会復帰を可能
にする条件づくりに日夜努力している。さ
らに、栄養改善にも惜しみない協力者の一
員であり、保育指導を行なうという重大な
任務を背迫っているので、児童福祉施設関
係職員が栄養管理に最大限の力を発揮でき
るよう一層の関心を高めなければならない。

（二）児童福祉施設における栄養管理

小児の栄養はどうあるべきか、疾病にか
からないための栄養摂取、良好な栄養状況
ということに小児科医、保健所栄養士らが
努力を重ねているが小児専従栄養士はいな
い。

授乳期、離乳期、幼児期に下痢、消化不
良にならないように、また栄養失調になら
ないような指導の徹底が期され、養育者と
くに母親の関心が高まった。これによって

人口動態統計の乳児死亡によると出生千に對し、大正九年には一六五、七人、昭和十五年九〇、〇、二十二年七六、七人、三十二年三九、八人、四十年一八、五人、五十一年一〇、〇人、五十一年九、三人、五十二年には八、九人（二十二年、三十年、四十年は沖繩県を除く）と年々、死亡率が低下し、喜ばしい実情になっている。医学、栄養学の進歩と生活環境の好転を含めた衛生思想の普及徹底が成果を挙げている。

大凶作、大震災、その他非常事態による食糧飢饉が起れば、母親は本能的に自分の子供に食を優先して与える。これが昭和二十年前後から二十年代には我国の各地でみられた。今日では、食糧に困ることは我国では殆んどないと云つて過言ではない。昭和二十年十一月、日本政府は二十一年度の国民一人一日当たりの食糧供給可能見込み量を一三七五カロリー、蛋白質四一グラムと算出、当時の標準所要量（二二六〇カロリー、七六グラム）の六五パーセントで、生命を保持し得ない窮状をG H Qに訴えている時代を思うと想像もつかない現状となっている。

しかし、發展途上国の人達は現在それ程でもないが可成りの窮状があることを知る必要がある。世界の地域別人口と栄養水準（一九七〇年推計）一人一日当たりによると、エネルギーで、全世界平均（保健必要量に對する供給比率）一〇二、先進国平均一一九、發展途上国平均九六（南アジア九一、アジア・極東九三、アフリカ九四、中東九七、南アジア・東南アジア九八、ラテンアメリカ一〇六、共產圏平均九四（アジア共產圏八八、ソ連・東欧一二四））となっている。一九七〇年の人口三七億一千九百万中、先進国が二千七百万（一九、五パーセント）、發展途上国一七億六千万二千（四七、三パーセント）、共產圏一二億三千百万九千（三三、二パーセント）、そのうちのアジア共產圏八億八千三百万五千（二三、八パーセント）となっている。また平均増加率予測で、全世界二、一パーセントに對し、發展途上国二、七パーセントと可成り高い増加率であり、食糧危機が到来すると世界の子供達の發育や健康を左右するし、また可成りの良い傾向になった児童福祉施設の楽しい食事、児童の明るいム

ードを阻止されることになりかねない。一人一人の生命を大切にすることを基本的食事から遠く離れることになる。近い将来には、食糧危機が到来するのではないかと世界の人口、食糧問題の研究者によって懸念されていることもなお一層検討していく必要がある。

児童福祉施設の小児栄養が重視されるようになったことを振り返ると、児童福祉法の制定と「児童福祉施設における給食業務の指導について」の通達（昭和三十一年五月二十四日 児発第三〇二号 厚生省児童局長から各都道府県知事宛）がだされて以来、徐々に給食による成果が小児栄養面に具現化している。それまでは、児童に焦点を合わせることでできる福祉事業家や保母を中心とする、いわゆる篤志家の奥さんや使用人が片手間に簡単な食事をつくり、空腹を訴える小児に食事を与え、空腹を満たしてやるのが大部分で、健康維持増進や成長発達を助長することが第二義的に考えられていた。

今日の發展過程までには、給食材料費が低く、設備投資が思うに任せない状況であ

った。赤十字募金、各種振興事業、国及び都道府県市の育成勸奨などによって、また生活の中での衣服生活、住居生活にも可成り余裕ができ、スポーツ、休養、リクレーションなど生活面に変化の富んだ内容も、適切とはいえないまでも普及し、母乳栄養の関心の高まりと母乳栄養に劣らないいはば完成した乳製品が生産され、食生活もインスタント、スピード料理と一種の家庭的なものから離れた企業ベースの食品の利用もみられている。これが何に起因するかは単的に断言できないが、子供の真の心に通じる意味合いでは、過去の利点ある手づくりの料理は心を豊かにする上にも大切であり、現在、求直の心にとっては真の心を求める一つの転換機と考えられている。

昭和三十一年には、児童福祉施設における給食業務指導についての通達がだされ、栄養士を配置して児童福祉施設の給食指導を行う県、指定都市は増加した。通達がだされた年には、高知県厚生労働部児童家庭課に栄養士が配置され、それ以前は各県・指定都市の衛生部局並びに保健所が指導に当たっている。以後においても民生・衛生部

局及び保健所が協調して指導に携っているが、富山県厚生部婦人児童課では、二十五年に十二月～五月の半年勤務の形態で栄養士を配置されていた。高知県に次いで三十二年には、名古屋市民生局保育課、翌年には川崎市民生局児童課に、その後、三十六年には川崎市に二名配置、三十六年には秋田県厚生部婦人児童課に、三十七年には福岡市民生局婦人児童課に、三十八年には和歌山県民生部婦人児童課に栄養士が配置された。指定都市では、前記のほか、四十二年に横浜市民生局児童課に、四十三年に北九州市婦人児童課に、四十五年には大阪市民生局児童課に、四十六年には京都市民生局保育課、横浜市民生局保育課に専任の栄養士を配置し、以後、各県とも充足に努められているが乳幼児期から青少年期までの最も大切な時期にある給食対象者を収容している施設を指導するのであるから、もっと強力的に、人的、物的面に充実、改善が切望されている。通達をだされている昭和三十一年の「国民栄養調査（戦後十年国民栄養調査報告書）」の結果によれば、食糧不足の時期を学令期以前に経験した児童は十

年後の今日といえども、なお、その発育が十分回復していない事実より、乳幼児の栄養が如何に重要であるか窺われる。……従って、心身ともに旺盛な発育時期にあり、しかも家庭的、社会的に不遇な環境にある児童を多数収容して集団給食を行っている児童福祉施設における給食業務は極めて重要性をもつものである。……」そして、給食業務の指導体制の確立では、

① 幹部職員の給食業務の重要性の認識、担当職員に適時講習会、研究会等による知識技能の向上をはかる。

② 保健所と連絡を密にし、給食業務に助言及び指導を求める。

③ 重点的指導を行い「給食モデル施設」とし、一般施設の水準向上に資する。

④ 成果をあげている病院、研究機関及び児童福祉施設における研究成果を充分活用する。

給食業務指導の重点では、

① 栄養必要量の確保

② 合理的な食事の給与

③ 給食管理の確立

などについて通達している。

この当時から前記のとりの栄養士配置の都道府県、市の民生部局、衛生部局、保健所、外郭団体などの素晴らしい協力によって今日に至っている。

筆者及び指導担当者が京都市内の児童福祉施設に対する指導を実施した一端を振り返えると、昭和三十年頃から可成り精力的に指導業務を担当した。

栄養改善をはかる一方法として、強化米配付を巡回指導の際行い、三十二年十二月には「三、五、十五才用冬季献立例」を該当施設に配布、三十三年十月より、保育所運営の基礎となる「児童福祉法による保育所措置費の国庫負担制度」の改正が行われ、給食費の増額、給食形態の向上をはかる献立カード制の実施で、指導の徹底をはかることに努めた。栄養士未配置施設の保育や給食担当者は、並ならぬ努力を重ねた。

三十七年度から毎年一回、児童福祉施設に対し、財団法人日本児童福祉給食会、厚生省、各府県市が「脱脂粉乳とその効率的利用をはかる内容の研修会」を行うことになり、京都市保母会と京都市は第一回を、昭和三十八年一月に大和料理専門学校を会場

として「調理技術の基本、脱脂粉乳の効率的利用法、調理例、施設における栄養管理等の内容」の講話を、その後、各保健所で実習を行うようになった。

昭和三十八年二月には、京都保母会が「まいにちの献立」をとりまとめるに至った。また市立保育所保母及び調理師等には、保健所栄養士が中心となって「乳児食及び幼児食」の指導、保育所給食技術の向上に努めている。養護施設、精神薄弱児施設、肢体不自由児施設調理担当者に対しては、昭和三十九年十二月、四十一年一月に東山保健所を会場として、特に調理実習と座談会を行った。このようなことが全国各地で行われ今日に至っている。

現在、食糧問題、省エネルギー問題などがとりあげられているが、今から十余年前の「児童福祉施設調理担当者（養護・精薄施設の部）の実習会調査集計表」から当時（昭和四十一年一月二十日実施、一週間平均）の状況を八施設平均（積慶園、児童院、青葉寮、平安徳義会、迦陵園、大照学園、若杉学園、つばき園、桃山学園）で見ると、

① 肉類の使用順位は施設によって多少の

差異があるが、豚、牛、鯨、鶏、レバーであり、日本児童問題調査会調（三十七年六月号、子供の栄養、以下調査会調という）の鯨、豚、牛の順位と異なっている。

② 魚と魚加工品では、さば、あじが一位三位がソーセージ・かまぼこ、以下ちくわ・さつま揚げ、いわし・さんま、かれい・塩魚、缶詰・にしんであり、調査会調のさば、あじ、ちくわ・さつま揚げ、ソーセージ・かまぼこの順位と異なっている。

③ 卵の一週間当たり〇、五、一個が十三%、二、三個が三十八%、四個以上が五十%の施設であり、調査会調の三十六%、四十一%、二十三%と異なっている。

④ 野菜（いも類含む）では、じゃがいも、きゃべつ・ほうれん草、もやし・白菜、ねぎ類・人参、青菜、大根、ごぼうの順位であり、調査会調のじゃがいも、ねぎ類・人参、きゃべつ・ほうれん草、もやし・白菜の順位と異なっている。

⑤ 食品の購入（便宜の有無）では、商店で主たるものに五十八%が有、従たるものに十二%が無、卸売市場で主たるもの

に二十三%が有、従たるものに三%が無、生産者で従たるものに三%が無となっているのに対し、調査会調は、商店有五十%、無五%、卸売市場有二十%、生産者有二十五%となっている。

⑥ 燃料の使用状況では、ガス八七、五%、重油一二、五%となっているのに対し、調査会調の薪三十六%、ガス二十二%、木炭二十%、石油十一%、重油七%、煉炭及び石炭がそれぞれ二%となっている。

当時と現在の差異は地域的差異、時代的変遷によるもので、さらに児童福祉施設食糧費（含間食費）から影響を受け、満足な結果を得られないと思われる。

しかし、収容児に対する栄養学的配慮の上の嗜好を尊重したものでなければならぬ。

最近この調査を実施していないが、この種の給食が大巾に変更を求められる必要性が高まっている。現実には可成りの選択食、献立内容の変化を望む声が強いかかわらず収容児の心を豊かにする献立内容には、人的、物的配慮が一段と要請される。それ

には食品の購入に成果を挙げる方向がみられなければならない。

福祉施設の給食に理解がみられつつある今日、社会福祉施設の充実の一つに栄養士の充足をとりあげられるようになってきているが、養成施設（管理栄養士・栄養士）から優秀な有資格者が出現するようになってきているので、大いにその人的資源を活用されるべきである。

ここに若干その就職実態を述べる。社団法人全国栄養士養成施設協会調べの昭和五十二年管理栄養士課程及び栄養士課程卒業生の就職実態調査結果（五十三年十一月によると管理栄養士課程調査校二十七校、卒業生一二五〇名に対し、未就職者三三三名（二十六、六%）となっている。児童福祉施設には、栄養士業務就職者のうちの僅か二、七%（十三名）であり、未就職者の中には、児童福祉施設で可成りの活躍を期待できる人材が養成されているが、やむを得ず未就職で待機または免許所有のみに終っている。もっとこれらの有資格者が栄養管理担当者として従事する必要がある。

（二） 栄養管理担当職員とその業務

児童福祉施設の栄養士配置率の現状は、集団給食に対する行政や施設長らの認識の一つを示すものと考えられているが、表2・1及2・2に示すとおり、児童福祉施設は栄養改善法第九条の二の規程の集団給食施設一回一〇〇食以上または一日二五〇食以上の施設中、栄養士配置は最低の二〇、三%で、病院の九九、五%には遠い。せめて、学校の四五、三%を上廻る比率で努力としては社会福祉施設の八九、九%を上廻ってほしいと思う。一回一〇〇食未満または一日二五〇食未満の施設中、一二、四%で、せめて学校の一二、五%、社会福祉施設の五一、九%を上廻る傾向になってほしいものである。

児童福祉施設には、それぞれの特性があり、特性に適した給食や栄養指導が必要であり、次のようなことを配慮して行うことになっている。

① 発育の著しい時期である。

② 乳児院、養護施設、盲ろうあ児施設、教護院などでは、家庭的雰囲気が必要で

表 2-1 年次別集団給食施設数及び栄養士配置率
(1回100食以上または1日250食以上の施設)

年 度	総 数	学 校	病 院	事業所	児童福祉施設	社会福祉施設	きょう正施設	その他	
昭和									
施設数	30年	16,026	9,075	2,030	2,073	1,814	193	110	731
	35	23,893	14,161	2,665	3,303	2,206	265	133	1,160
	40	31,745	18,675	3,126	5,733	2,380	345	118	1,363
	45	35,477	18,026	3,612	7,513	3,455	481	121	2,269
	50	37,567	16,169	3,957	8,314	5,991	770	86	2,280
	51	38,527	16,033	4,077	8,200	7,123	945	95	2,054
昭和									
栄養士配置率%	30年	18.9	6.4	78.5	26.9	3.9	13.5	26.4	22.4
	35	27.1	15.0	91.3	36.8	5.6	36.2	31.6	39.1
	40	31.4	15.9	96.5	48.7	15.0	54.8	38.1	51.7
	45	40.2	25.9	98.6	51.8	12.6	75.9	40.5	57.2
	50	47.6	41.0	99.0	50.2	19.1	86.6	44.2	57.4
	51	48.9	45.3	99.5	48.9	20.3	89.9	43.1	57.0

注：施設数は各年末現在数である。昭和46年までの数値は沖縄県を含まない
資料）厚生省報告例

表 2-2 年次別その他の給食施設数及び栄養士配置率
(1回100食未満または1日250食未満の施設)

年 度	総 数	学 校	病 院	事業所	児童福祉施設	社会福祉施設	きょう正施設	その他	
昭和									
施設数	35年	13,835	744	2,524	3,304	6,002	565	55	1,641
	40	20,160	2,289	3,264	4,284	7,754	728	69	1,781
	45	23,877	2,071	3,278	5,169	9,619	994	76	2,674
	50	25,631	2,049	3,186	5,515	10,457	1,393	77	2,954
	51	26,438	1,956	3,410	5,425	11,155	1,479	62	2,951
昭和									
栄養士配置率%	35年	14.4	4.0	60.2	4.1	2.2	9.6	3.6	7.4
	40	15.3	2.1	59.7	10.4	3.4	17.4	11.6	13.4
	45	19.0	7.3	72.2	13.1	6.1	26.5	27.6	16.9
	50	23.0	11.5	77.0	16.0	10.8	43.6	28.6	18.7
	51	23.7	12.5	75.5	14.4	12.4	51.9	25.8	20.4

注：施設数は各年末現在数である。
資料）厚生省報告例

ある。

③ 虚弱児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設などでは、治療の内容が必要である。

④ 保育所、精神薄弱児通園施設では、正しい生活習慣、特にしつけ、偏食についての注意が必要である。

⑤ 地域社会、家庭の食生活改善により影響を与えること。

これらのことを給食や栄養指導に十分生かさなければならぬ。

即ち、献立作成、材料購入、調理、配膳、下膳、洗浄消毒、本務整理を系統だてた組織の確立と一連の流れが円滑にできなければならぬし、誰がどの業務を担当するかは今日では明白であるが、未だに専門職以外の担当者が片手間に近い状態で、前記給食業務を遂行していることがある。

管理栄養士が修得する専門教育科目は、栄養学、食品学、食品衛生学、公衆衛生学、栄養指導、給食管理、調理、食糧経済、生理学、病理学、微生物学、高分子化学、生物化学、数理統計学、数理統計学実習、社会心理学、社会福祉、経営管理等の幅広い

学問領域になっている。

従って栄養管理、給食管理、衛生管理などの強化をはかる上には、専門知識を生かすことによって、適切な給食材料の購入から、調理、配膳、児童の完全喫食の促進など無駄の少ない効果が可成り期待できる。給食内容が豊かで、施設に適した魅力的な料理の給与、施設の運営方針に合致した児童の心を抱えた給食管理運営が科学的に実施され、部門間の連携、施設長の考えが給食目的や内容に成果を挙げるように具現化するようになる。

特に給食に関した内容を合目的に遂行する委員会で充実した給食改善が検討される。また給食予算の上手な活用ができれば。

給食業務内容の改善では、給食管理の年間計画、職員の勤務体制の向上、給食従事職員の職務内容の改善、向上、研究、研修の確立、給食費の検討など、さらに施設設備の改善、必要な機械、器具の整備、作業環境の改善、給食作業の標準化、能率化などの検討があげられる。

給食関係事務では、事務処理の標準化の検討、栄養関係帳簿の効率の活用と簡素化

の検討などがある。

食中毒、伝染病の対策では、衛生管理の連絡網、職場の衛生自己点検要領、食品材料の検収方法、食器の消毒方法、保存食、検査の取り扱い方法、手洗い方法、衛生教育の方法などがあげられる。

児童福祉施設向き食事内容の確立では、① 栄養給与基準及び食品構成基準などの改善としては、施設に合った栄養給与基準の作成、給与栄養量の検討、施設に合った食品構成の条件の検討、強化食品の活用方法などがあげられる。

② 献立作成及び食品材料の購入保管、受払いなどの改善としては、よい献立の基礎条件の検討、献立カードの作り方、献立の共同研究、食品材料の購入方法、食品倉庫の管理方法があげられる。

③ 調理方法、調理技術などの改善としては、主な料理の調理方法、味付けの改善、標準化などがあげられる。

④ 間食給与の改善としては、施設内での間食のあり方の検討と加工、嗜好調査、栄養・衛生的給与の工夫、間食の調理教室などがあげられる。

⑤ 喫食率の向上及び給与効果の検討、改善としては、適温給食、行事食の工夫、正しい食事環境作り、喫食率の調査、改善、調査結果の活用、適温食時間の形成などがあげられる。

⑥ 栄養指導、生活習慣指導としては、給食を通じて望ましい生活習慣指導の確立。栄養教育によって、年齢段階の栄養摂取、個人に適した栄養摂取の確立。偏食、食欲不振などの矯正指導によって、偏食、食欲不振の原因追究とその矯正事例のまとめ、矯正方法の確立。健康管理によって、身体発育の改善と給食、診断結果とその処置、特異体質児の健康管理、家庭との連絡による健康管理をはかる。児童の家庭及び地域社会との食生活改善に対する啓蒙指導の方法としては、保護者教育（学級）の開催、保健所その他の社会資源の活用、家庭食生活調査とその改善指導などがあげられる。

⑦ その他望ましい食品構成の確立などがあげられる。

仏心を持つ職員の役割から述べると単に子育てのための考え方は、過去のものであり、今日では成人になっても、その子が学

びとって来た教えを次の世代に伝達していただけるだけの力を發揮できるように養育する必要がある。人類すべてが社会的に恵まれている。これら現代人に何を欲求されるか、現代人と仏教徒の使命で明らかに、無気力、欲求不満、劣等感を持たずに、無気力、無関心でなく虚偽と虚栄に明け暮れない正常な精神状態の生活の出来る精神の調和が大切であり、安定性、自律性、積極性、現実性、協調性などが整うことである。筆者はこのような精神状態で、常に児童に対し、物事がはこばれる現代人が児童福祉に携える人達だと思ふ。

肉体と精神との調和を計る基礎訓練の具五縁（身心と環境の調整を計る準備）、呵五欲（感情と感覚とを調整する方法）、棄五蓋（消極的な觀念を棄て、積極的觀念に切り換える）、調五事（精神と肉体との調和を計る）、行五法（身心の調和を保持することが出来ると共に、改善進歩向上発展やむことなき大活動）などの仏道修業のルールは、これからの児童福祉に携わる人達には欠くことの出来ないことにならう。

（四）児童福祉施設に適應した食事管理

児童福祉施設の食事管理に関連すること、前述したが、さらに食事管理上望ましいことについて述べる。これは、施設の種類毎に確立されるべきで、その努力がはらわれてはいるが、施設の性格から将来を展望すると未だ未だ不十分である。

① 助産施設では、保健上入院助産を受ける必要がある妊産婦が経済的理由により入院助産が出来ないので入所させて、助産を受けさせることを目的としている。母胎内で胎児は既に出生後の健康を左右する条件づくりをしている。

② 母子寮では、配偶者のない女子またはこれに準ずる事情にある女子とその者の監護すべき児童を入所させて保護する目的としている。母子の健康管理が十分出来る食事が重要である。

③ 児童厚生施設では、児童遊園、児童館などで児童に健全な遊び場を与えて、その健康を増進し、情操豊かにする目的としている。その目的からは直接、食事管理に結

びつかないと考える人もあるが、健康増進や遊びでの事故を起こさないためにも心すべきことである。

④ 乳児院では、二歳未満の乳幼児を入所させて、これを養育することを目的としている。この入所期間に集団保育に付随するホスピタリズムの存在が問題となり、栄養効率を阻害するといわれ、エネルギーの十～二十%増を必要と考えられている。また入所児の多くは医学的、社会的な欠陥をもつ保護者より生まれた児童が多く、心身面で一般児童にみられないハンディを背負っている場合が多いことを心しておく。従って、発育段階に応じた調乳、半流動食、半固形食、固形食を個人別に給与し、病児がでないように、病児がおれば、きめ細かい病児用特別食が必要である。

⑤ 保育所では、日々保護者の委託を受けて、保育に欠ける乳幼児の保育が目的であり、その重視事項は「保育所の運営等について」で述べられているとおり可成り明確な考え方である。

⑥ 養護施設では、乳児を除く保護者のない児童、虐待されている児童、環境上養護

を必要とする児童を收容することを目的としている。この入所児は精神的、環境的に恵まれない児童が多く、一般的に欲求不満、情緒不安定、劣等感などの状態がみられるので、家庭的な暖みが必要である。また身長、体重などの体位は一般的にやや劣りがちで、給食上児童の成長発育に必要な栄養を確保する。さらに収容前の栄養欠陥の是正、偏食矯正、正しい食習慣の育成などが大切で、快適な生活が出来る配慮をするこ

とである。

⑦ 精神薄弱児施設では、精神薄弱児を入所させてこれを保護し、併せて独立自活に必要な知識、技能を修得させることを目的としている。この入所児は精神諸能力の全般的発達が普通児より立ち遅れた状態であり、さらに身体的障害を伴う場合も多い。

これらの状態が重いものもあり、入所児は知能、体位、行動など個人差が非常に大きいので、給食上の配慮が重要となってくる。

また拒食、偏食などに陥り易く、量より質に重点をおいたり、複数献立などの実施でこれらを防止する。咀嚼く、燕下（消化、吸収）が不適切な事例も多く、可消化性の

高栄養素価の食品選択が重要である。身体発達の遅滞が著しいので、良質蛋白質の補給が必要である。歯や骨格などに異常が多いので、十分にカルシウム補給が必要である。代謝障害を伴い易いので、それに対応した献立が必要である。老化現象のことも考え、カルシウム、ビタミン類の増量が必要である。施設の指導訓練にもとづく運動量が多くなることについても配慮する。食事未自立の者が多く、食事をこぼしたり、嘔吐するような者も多いので、適切な栄養摂取が出来るように食事が多目に必要である。このような精神機能を効果的に援助出来る給食とする。

⑧ 精神薄弱児通園施設では、精神薄弱の児童を日々保護者のもとから通わせて保護し、独立自活に必要な知識、技能を与えることを目的としている。通園児は精神薄弱であり、IQは五十以下の児が多く、中には重度精神薄弱児もあり、咀嚼く不十分であるので、消化し易い調理が必要である。昼食は完全給食であり、朝夕は家庭の食事が与えられるので家庭の食事との関係を十分配慮する。精神薄弱児の腸管の運動機能、消化管

系の消化機能は不備であると考えられている。また精薄児は体調によって摂食量が異なり、健常児以上に盛り付け配分の適正が重要である。

⑨ 盲ろうあ児施設では、盲児またはろうあ児を入所させて保護し、独立自活に必要な指導または援助を目的としている。視力障害児は、将来、マッサージなどの資格取得のための訓練があり、高等部の労働量は可成り大きい。言語障害児は、クリーニング、印刷などの訓練を行うので、労作上の配慮が大切である。

⑩ 虚弱児施設では、身体の虚弱な児童に適正な環境を与えて健康増進をはかることを目的としている。虚弱児のうち結核性虚弱児は減少してきているが、喘息児、心疾患、腎疾患の児童が増加している。また体質的にはアレルギー性体質の児童が多く、アレルギー性皮膚炎、湿疹、結膜炎、腸炎など反復する者が多く、身体発育の遅れがみられる。虚弱児は偏食、食欲不振、少食などの問題があり、栄養的にも、調理上にも特別の工夫を必要とする。消化不良を起こしやすい児童が多いので、個人差に応じ

た調理が大切で、特別治療食の配慮が必要であり、年少児などに対する食事介助も必要とする。

⑪ 肢体不自由児施設では、上肢、下肢または体幹の機能障害のある児童を治療するとともに、独立自活に必要な知識、技能を与えることを目的としている。そこで、不自由な身体を最大限に生かして動作を行っているので、単位時間当たりのエネルギー消耗は健常時より多い。特に日常の機能回復訓練、職能訓練などは可成りの激労作であり、エネルギー不足をきたさないこと。

また消化器官が弱く消化吸収が劣りがちで、消化吸収の容易な良質食品摂取が望ましい。これら摂食に効果ある工夫をする。

⑫ 重症心身障害児施設では、重度の精神薄弱及び重度の肢体不自由が重複している児童を入所させて保護し、治療及び日常生活の指導をすることを目的としている。個々の児童を常に十分観察し、適切な給食をすることであり、特に、食事の全介助が必要な障害児には、食形態や食器具などの工夫が必要である。

⑬ 情緒障害児短期治療施設では、軽度の

情緒障害を有する十二歳未満の児童を短期収容し、または保護者のもとから通わせて情緒障害を治すことを目的としている。食事ときには、児童それぞれの収容目的に沿った配慮をした雰囲気とマッチした工夫が大切である。

⑭ 教護院では、不良行為をなし、またはなすおそれのある児童を入所させてそれを教護することを目的としている。発育期児童の情緒安定をはかるためにも、家庭的雰囲気、給食が望ましい。生活の中の運動量、作業量が多く、午前中は学習、午後は学習または各種スポーツなどのクラブ活動、職業指導が行われ、その後寮舎での生活であり、エネルギーなど量的にも不足のない注意、情緒安定上、寮舎における夜食（果物など）を必要とすることも多い。収容目的に沿った給食に関心を高めるようにすることである。

近年、収容児童の低年齢化、日常、身体条件による不活発な生活をする小児も可成り多くなる傾向で、肥満にならない適正な栄養摂取が望まれる施設もある。

一般的に子供の心を抱えた適正な食事管

理は健康に正しい成長を遂げることでなければならぬ。特に、個性の強い独立心の強い子供であっても親或いは養育者の保護を受けることなく正しい発達は不可能であるその際の食事状態によっては、健康な発達を示めさない。

乳児期の母乳栄養にまさるものはないが、人工栄養や混合栄養にたよらざるを得ない子供もあり、また離乳食の適正給与時期、条件などが、食事管理をする人が定まっていけない場合には、質的、量的に過不足を生じる。

核家族化した時代になっているが、あるときには祖父、祖母、叔父、叔母が興味本位のみに食事給与をされることは著しい質的・量的に過不足を生じることになりかねない。食事管理者（母親または養護者で食事摂取状況を把握できる人）に誰が食事を与えても質と量が伝達される必要がある。

幼児期、学童期、思春期それぞれの時期層において、健康者と病弱者があり、主食・副食の形態や内容を如何に決定するかが、成長発達並びに治療上に及ぼす影響が大きく、且つ重要である。施設においては、食

事の状態を如何に関係者に周知徹底するかがあげられる。おやつ一つについても、単なる既製品購入にたよることなく食生活の一環として考えたものを与える。また適温給食は心暖まるもので、非常に重要なことであり、本来の食物摂取条件に合致したことでなければならぬ。一般に児童福祉施設その他の施設で、食中毒が発生することがあるが、これは真の給食ではなく、単に与えればという安易な考えによることが多い。真の給食が出来るか出来ないかは、その給食に必要な栄養・衛生・美味・適正価格などの条件を満たしているかにある。特にこの条件を満たしているかの判断を下せる手段は、栄養士及び施設長の定める適任者の検査があげられる。検査は喫食者に適した内容をいつ給与するかを経済を含め判断することである。衛生面では、特に事前検査が妥当なものであり、給食開始前に検査が実施されている施設では、検査票に検査時刻、検査者名の記入、鮮度、味付、温度、分量、色彩等に関する意見及び指示欄を設け、必要事項を記入し、調整の是非、給食開始決定を行なう。また今後の改善を常に

意欲的な給食内容の向上をはかる資料としている。

施設における食事管理は、給食を中心にせめて昼食に、せめて間食に或いは一日三回の食事を給与している施設では、せめて夕食には児童が安心して良い食事を他の子供達と摂食しているのだという気持ちを食べ卓で感じられることでなければならぬ。

今日、明るい快適な食卓を囲むように漸次行なっているのが、施設へ入所している不安をすっかり打ち払うだけの食事内容と必ずしもいえない。児童福祉施設の都合でと考えられるような施設の特性を發揮できない。全く他に依存しているような既製食品、半加工食品に頼る傾向がなかるうか。健康を蝕む程の食事内容でなくとも、対象に尤も適している子供の基本的成長（心身とも）を阻止するようなことはないだろうか。この根本的な考えにたった給食がなされなければならぬ。

といって、施設にとっては、最善の努力を払われているに拘らず、仮に弱点とする一事例をとりあげられたときには甚だ心外であろう。ただ、予算がないから、人材が

得られないから；等、キラーフレーズすべてが解決出来るものではない。

国際児童年であるから、地につけてきた給食内容を見直して、現状でよいのか、さらによい方法はないか、一人だけ、小人数だけで解決することなく、関係者が連携を保ち一致協力して解決することなど多々ある。時代の流れで、高・中年層の成人病、健康問題がとりあげられているが、現在、小児である子供達は、やがては成人になる。次代を担うに当たって、一般にいわれる現状の豊かな食糧時代に終結を遂げるときは石油問題、気候的変動、人口増加、天災などの繰り返えしによって、その可能性は多分に包含している。現に食糧は発展途上国では、今の食糧資源に不足を来していることを前述のとおり承知していなければならぬ。効果的に食糧資源を利用しなければならぬが、その利用に当たって特に考えなければならぬことは、折角調理された食事が、給食されたに拘らず残され、完全喫食されていない。資源が有効に利用されていないことである。適正な給与物であれば、単なる嗜好、そのときのムードのみで

残食するのではなく、その改善をはかる基礎調査や事例研究をすることではなければならない。

(五) 保育所における栄養指導

例えば保育所の栄養士は、定例研究を行なつて、献立の設案、栄養計算などを効果的に実施することを中心に努められていたが、栄養指導を重点的に行う必要性が痛感されるようになっていく。特に幼児に対する栄養指導は、社会的背景など様々な条件が左右することを十分承知しなければならぬ。指導の好ましい方法として、ポスターづくり、家庭への印刷資料、保護者会での指導資料があり、ポスターでは「園一枚」或いは会議出席者一人一人が必ず一枚を持参して、検討を重ねられている。

四月には楽しい食事、保育所になれる。七月には暑さに負けない丈夫な体、睡眠と休息と栄養のバランスなど。十月にはおいしい食事、有難う（感謝の気持ち）。二月には今日のおかずはなんでしよう、考えさせ発言させる。併せて保育の指導による食事前の手洗い。食事は楽しく、よく噛む。

食後のうがいなど、家庭での正しい生活との結びつけによる指導が行われ、幼児と常に接する保育に給食についての実態やあり方を十分に理解させ、幼児達の食事習慣、人格形成に役立てることが大切である。

日本の食文化では、「食とは人を良くすることである」といわれているが、道元禪師が一二四六年にお粥やご飯をいただくために食堂に赴く法として「赴粥飯法」を永平寺で撰述している。この書の「五観の偈」がある。五観は食事を受ける者の五つの反省と感謝の意とされ、「一には功の多少を計り、彼の来処を量る。二には己が徳行の全欠を付て供に応ず。三には心を防ぎ過を離るるは貧等を宗とす。四には正に良薬を事とする形枯を療せんが為なり、五には成道の為の故に、今此の食を受く」とある。

一 の概意は、この献立が今、われわれの食卓にあがるまでには、数多の手間がかかっているか、人々の苦勞を考へることである。二には、われわれが食物を摂取するのは、一日不作、一日不食の教え、即ち、自己の仕事を完全に遂行するためである。三には、貧欲、怒欲、愚痴の心で食卓に向か

って食事をすることは、過ちを犯すことである。四には、良薬を服んで身体の枯死をばむと考えて、食事をするのが大切である。五には、食事をする目的は、眞の道を成就するためである。

この五観の偈を唱和して食事を載く機会を仏事で与えられた人は、集団生活の際には、特に個人個人の望ましい食生活実践への動機づけの自覚が出来るであらう。

片寄った食事は多くの人の心を知る上に偏見になりがちでなからうかと考える。健康上、好ましい食事姿勢にはならないであらう。強制はされなくとも、幼児の頃からこのような教育を受けることによって、今日の自由な食生活が出来る見直しが大切である。

保育所以外の栄養指導については、別途の機会に述べる。

(六) 栄養所要量と小児栄養

栄養所要量は、我々が健康な生活を送り、日常生活活動を円滑に営むために一日にどのような栄養素をどれだけ摂取すればよいかの目安を基準的に示したもので、実験

的に求められた最低必要量または飽和量に原則として安全率が加味され策定され、性別、年齢別、妊婦授乳婦別、労作強度別に分けて作成されている。現行の栄養所要量は昭和五十年三月に栄養審議会（現公衆衛生審議会栄養部会）が厚生大臣に答申、五十五年まで使用されることになっている。これは、十九世紀末以来の栄養学の急速な発展と軌を一にして各国でも策定されている。我国では昭和十六年につくられ、最近では、概ね五年くらいの間隔で改定されているが、五十四年八月、栄養部会の審議に基づき「日本人の栄養所要量」の改定を答申、昭和五十五年四月以降五年間の学校給食や、各種栄養指導の目安として活用される。以前は食糧難や、栄養不足時代に努力目標の意味で使用していたが、今日では栄養の摂取過多や、運動不足などが問題になっているので、抑制の考えが強くなっている。表3のとおり年齢階層を現行の基準より細分化し、二十歳～四十歳未満、四十歳～六十歳未満、六十歳代、七十歳以降を、二十歳代、三十歳代、四十歳代、五十歳代と十歳さみに、さらに七十歳以降を八十

歳以降に、従来より少なめの所要量を示し、それぞれに適した摂取をはかる目安を示している。

また表4に示すとおり、エネルギー所要量を個人に適用できるよう体重当たりの値が示されているのが注目をひいている。

さらに表5に示すとおり、一人一日当たりの栄養所要量は国民一人当たりに直した全体の目安を示している。

そのほか、高血圧症や脳卒中など成人病と関連の深い食塩の適正摂取量は一人一日当たり十グラム以下と時代的背景を踏まえ、警鐘を明らかにしている。さらに、健康の維持増進のための栄養のとり過ぎによる肥満防止に、過剰摂取には運動によるコントロールの心掛けが必要とされている。

小児の一部には肥満の傾向が著明なものもあり、また一方、健康を損うおそれのあるものも認められる。

施設では、この栄養所要量から、五十五年四月以降に施設向きの基準が示されるようにならうが、また小児栄養についての研究が進められ、適正な栄養摂取と小児栄養管理に必要なリズミカルな生活日課の形成

表3 年齢ごとの基準エネルギー所要量 (55年—60年)

年 齢 (歳)	身長推計基準値 (cm)		エネルギー (kcal)	
	男	女	男	女
0～			120/kg	
{ 0～ (月)			110/kg	
{ 2～ (月)			100/kg	
{ 6～ (月)				
1～	81.8	80.3	970	930
2～	91.3	89.9	1,240	1,200
3～	98.5	97.1	1,400	1,350
4～	104.7	103.4	1,500	1,400
5～	110.6	109.4	1,600	1,500
6～	116.3	115.3	1,700	1,600
7～	121.9	121.1	1,800	1,600
8～	127.6	126.8	1,850	1,700
9～	132.7	132.7	1,900	1,800
10～	138.0	139.1	2,000	1,900
11～	143.9	145.5	2,100	2,100
12～	150.8	150.9	2,300	2,200
13～	158.1	154.6	2,400	2,300
14～	164.2	156.6	2,600	2,300
15～	168.1	157.5	2,650	2,200
16～	170.0	157.7	2,700	2,200
17～	170.9	157.8	2,700	2,100
18～	171.3	157.8	2,650	2,100
19～	171.6	157.7	2,600	2,050
20～	170.0	156.6	2,500	2,000
30～	166.6	154.5	2,400	1,950
40～	164.0	152.5	2,300	1,900
50～	161.7	150.3	2,200	1,800
60～	159.4	147.5	2,000	1,700
70～	157.0	144.1	1,800	1,500
80～	154.7	140.5	1,600	1,400

＜注＞「普通の労作」をする人（職業でいえば、小中学校の教師、医師など）の基準で一般サラリーマンなど「軽い労作」に当たる人々はこれより低くなる。また、身長の大きな人はこれよりやや多めに、小さな人は少なめにする。

表4 栄 養 所 要 量
(普通の肉体的仕事量の人の標準値)

年 齢	エネルギー (kcal / Kg / 日)	
	男	女
0 { 0~ (月)	120 ± 20	120 ± 20
	110 ± 20	110 ± 20
	100 ± 20	100 ± 20
1~ (歳)	86	86
2~	92	92
3~	92	91
4~	88	85
5~	85	82
6~	81	78
7~	77	70
8~	71	66
9~	65	62
10~	62	58
11~	58	56
12~	56	52
13~	51	49
14~	49	46
15~	47	42
16~	45	42
17~	44	40
18~	43	40
19~	42	39
20~	40	39
30~	38	37
40~	38	35
50~	37	34
60~	36	34
70~	34	32
80~	32	32

身長センチから100を引いた数値を0.9倍しそれにこの表の該当年齢欄の基礎数値を掛けたものがその人の栄養所要量となる。ただし、成長期の子供などの場合は体重に表の該当年齢相当のエネルギー値を掛けた数値が栄養所要量の一応の目安となる。

表5 1人1日当たりの栄養所要量……
(▼今回減らしたものの)

	今回 (昭和60年推計)	前回 (昭和55年推計)
▼ エネルギー	2,000 kcal (カロリー)	2,100 Cal (カロリー)
▼ たんぱく質	65g	70g
カルシウム	0.7g	0.7g
鉄	11mg	11mg
ビタミン A	1,800 IU (国際単位)	1,800 IU
▼ ビタミン B ₁	0.8mg	0.9mg
ビタミン B ₂	1.1mg	1.1mg
ナイアシン (ニコチン酸)	13mg	14mg
ビタミン C	50mg	50mg
▼ ビタミン D	150 IU	200 IU

- ＜注＞① 栄養所要量は年齢により違うが、この表の数字は所要量をその年の年齢別推計人口に照らして国民1人当たり直したもので、全体としての目安
 ② エネルギーの単位は、国際的な表示統一のため今年から kcal に改められた。単位としては Cal (大カロリー) と同じ。

によって、益々、健康維持増進が重要性を帯びるものとなる。関係者の一層の協力が要請される。

(七) まとめ

以上、筆者の考えについて述べてきたが、

一、栄養の文字を見直し、さらに栄養改善は個人に最も適した栄養状態を維持向上させることで、仏教による説得力を重視する必要がある。

二、児童福祉施設の小児栄養の向上は仏心を持つ職員育成、栄養管理担当職員の充足とその業務の確立によって達成できる。

三、国際児童年を機会に、小児栄養の関心が高まる基礎的な取り組みを仏教の殿堂でとりあげ、さらに側面的援助が強力に実

施される必要がある。

など現況より一歩前進した方途を講ずることが、今後、益々課題事項になる。

註

① 国民栄養対策協議会編「日本語栄養—その成り立ちと語意」第一出版株式会社 一九七五年

② 岩淵亮順「食卓の仏教医学」株式会社六興出版 一九七六年

③ 中野迢「児童福祉施設給食指導について」『栄養展望』第二十一号、一九六六年 十一頁

④ 恵谷隆成「現代人と仏教徒の使命」『仏教福祉』第二号、一九七五年、四頁

⑤ 「保育所の運営等について」昭和三十三年六月(現行五十年七月改正)厚生省児童局長から各都道府県知事、各指定都市市長宛通知